

〔実践報告〕

平成24年度留学生交流支援制度（ショートステイ・
ショートビジット（SSSV））による異文化看護
（Transcultural Nursing）プログラムの取り組み
－ショートステイ（SS）におけるアジア3か国の学生の受入れ－

野地 有子¹⁾ 小林 美亜¹⁾ 辻村真由子¹⁾ 錢 淑君¹⁾ 田所 良之¹⁾
渡邊 美和¹⁾ 岩崎 弥生¹⁾ 緒方 泰子²⁾ 望月 由紀¹⁾

Transcultural Nursing Program founded by Exchange Student Support Program (Short Stay and
Short Visit)

－ Work for cultural exchange among asian nursing students in the short stay program －

Ariko NOJI¹⁾, Mia KOBAYASHI¹⁾, Mayuko TSUJIMURA¹⁾, Shukukun CHIEN¹⁾,
Yoshiyuki TADOKORO¹⁾, Miwa WATANABE¹⁾, Yayoi IWASAKI¹⁾, Yasuko OGATA²⁾,
Yuki MOCHIZUKI¹⁾

要 旨

独立行政法人日本学生支援機構の実施する留学生交流支援制度の助成を受け、アジア3か国からの留学生受入れを実施した。助成を受けたプログラムは、1997年度より米国アラバマ大学タスカルーサ校看護学部との間で実施している「異文化看護演習」を発展させ、本研究科の協定校である、ソウル国立大学看護学部（韓国）、北京大学看護学部（中国）、ガジャマダ大学看護学部（インドネシア）との間でも、学生が相互に短期滞在し、異文化看護について学ぶ演習を実施するものである。実施担当は、学術・国際活動委員会を中心に、学部・大学院教務委員会が協力し、領域横断的に多数教員が参画した。実施期間は、平成24年8月1日～9日（9日間）であった。参加留学生は、ソウル国立大学4名、北京大学2名、ガジャマダ大学2名の合計8名であり全て学部生であった。本学からは学生ボランティアとして学部生16名、大学院生13名の合計29名が参加した。留学生への支援は、言語に関する配慮、修学に係る教育・指導体制、生活面の支援、安全管理面の支援について、文化的配慮のうえで行った。

実施したプログラムの内容は、「サバイバル日本語講座」の受講に始まり、4か国の学生相互の異文化交流、各専門領域によるセミナーおよび施設訪問等であった。プログラム評価は、帰国後に提出された8名の学生のレポートの分析から行った。学習成果の評価方法と公表については、学生および派遣先大学からの承諾を得ており、本研究科倫理審査委員会の承諾を得た。学業関連、語学関連、異文化理解関連、将来の展望、国際人としての力量の面において自己評価は高く、また本プログラムへの満足度も高かった。多様な国の看護学生との学びの過程で、自分の意見を英語で述べ討議することに自信がついたと述べられていた。今回はアジア諸国に焦点化しており、アジア圏としての共通性と同時に違いの発見もあり、4か国の交流が「ダイバーシティ」の学びに有機的に機能したと考える。

Key Words : 留学生交流支援制度（ショートステイ・ショートビジット（SSSV））、異文化看護（Transcultural Nursing）プログラム、アジアの留学生、学生ボランティア、ダイバーシティ

1) 千葉大学大学院看護学研究科

2) 前千葉大学大学院看護学研究科、現東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科

1) Chiba University, Graduate School of Nursing

2) Former Chiba University, Graduate School of Nursing

Tokyo Medical & Dental University, Graduate School of Allied Health Sciences

I. 留学生交流支援制度（ショートステイ、ショートビジット（SSSV））の概要

留学生交流支援制度は、独立行政法人日本学生支援機構の実施する次世代を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材の育成と、国際相互理解の増進に寄与するための事業の一つである。千葉大学では、平成23年度より本事業に参画しており、看護学研究科は平成24年度に異文化看護（Transcultural Nursing：TCN）プログラムを申請し採択を得た。

留学生交流支援制度の目的は、学生の国際的な流動性が高まる中、多様な学生の受入れ・派遣の機会を提供し、国際的な視野を有する学生の育成を促進するとともに、大学等における学生相互交流プログラムや大学間ネットワークの構築等に寄与し、大学等の国際化を推進することである。支援の対象となるプログラムには、（1）3か月未満の学生の受入れ（ショートステイ（SS））、（2）3か月未満の学生派遣（ショートビジット（SV））、（3）3か月未満の学生受入れ、学生派遣の双方の実施（SSSV）の3つがあり、本研究科は（3）のSSSVの採択を受け、留学生の受け入れと、派遣の双方を実施した。

本制度を利用する留学生は、奨学金として一人8万円の支援を得ることになり、留学終了後には、留学成果をレポートにして提出することが義務づけられている。受入れ大学等本事業への予算措置はない。

本稿では、SSSVの中の、ショートステイ（SS）として、アジア3か国3大学からの留学生の受け入れを実施したので報告する。

II. ショートステイ（SS）による異文化看護（Transcultural Nursing）プログラム

1. 背景と経緯

千葉大学看護学部では、ヘルスケアを社会文化的な要因との関連から理解し、文化的感受性を高めることを目的に、1997年度より米国アラバマ大学タスカール校看護学部との間で、相互に学生が相手国に短期留学して受講する単位互換の授業「異文化看護演習」を提供してきた。今回採択を受けたプログラムは、当該プログラムを発展させ、千葉大学大学院看護学研究科の協定校で近年の交流が活発にみられる、ソウル国立大学看護学部（韓国）、北京大学看護学部（中国）、ガジャマダ大学看護学部（インドネシア）との間でも、学生が相互に短期滞在し、異文化看護について学ぶ演習を実施するものである。3か国3校からの承諾

と協力を得た。

2. 目的・目標

本プログラムの学習目的は、看護とヘルスケアを社会文化的な要因との関連から理解し、文化的感受性を高めることとした。学習目標は、（1）それぞれの文化に固有なケアをその文化的背景から理解する、（2）看護に影響を及ぼす文化的要因を分析する、（3）異文化看護におけるアセスメントの方法を習得する、（4）文化と看護の多様性および共通性を比較する、の4点をあげた。

3. プログラムの内容

- （1）病院、東洋医学診療所、保育園、保健所、市役所などの多彩な実践現場へ、本学教員の同行で訪問し、現地セミナーなどに参加する。
- （2）本学の学生と共に、アジア4各国の互いの国の保健医療看護の現状と課題に関する、少人数合同セミナーを行う。
- （3）本学の市民ボランティアによる留学生支援プログラム（例、サバイバル日本語講座など）に参加し、短期間の滞在にあっても、地域住民との多角的な交流を体験する。
- （4）国際交流会館における共同生活、文化的なイベントへの参加を通じて文化的交流の機会を得られる。

4. プログラムの特色

本プログラムの特色は、看護とヘルスケアについて文化的視点から理解するために、各国の看護やその国の制度についても学習し、さらに人々の生活を現地で体験することによって、より実践的な異文化看護を学習できることにある。特に、今回のアジア3か国に日本を加えた4か国の看護学生の相互交流によって、2国間の比較を超えた、多様性の学習を強化できる点が強みである。また、本学の学生は、学生ボランティアとして海外からの留学生の受入れに協力し交流を促進することにより、本学に居ながらにして国際交流を体験し、留学に準じた体験をすることができる点も特色である。

5. プログラムによる学習成果の評価

本プログラムに参加した学生が学習目標を達成できるよう、本学と留学生派遣元の教員が連携して支援にあたった。また、最終的な学習成果の評価は、留学帰国後にプログラム責任教員が課題に沿ったレポートを提出させ、学習目標の到達度の観点から評価した。評価方法については、本研究科倫理審査委員会の承認を得ており（申請受付番号24-24）、留学生および各大学の責任教員から承諾を得ている。

6. 留学生への支援体制

(1) 使用言語および言語に関する配慮

講義、および演習とそれにかかわるディスカッションはすべて英語で実施された。派遣側の各大学での留学生選抜において、この条件は明記された。日本語に関する配慮では、千葉大学留学生支援ボランティア会の市民ボランティアによる「サバイバル日本語」講座を、プログラム開始当初に設定した。

(2) 修学に係る教育・指導体制

本研究科における本プログラムの実施体制は、研究科長のリーダーシップのもと、学術・国際活動委員会企画・運営を行った。学部・大学院の教務委員会の協力を得た。その上で、本研究科全教員が係り、各分野において、講義、グループディスカッション、施設訪問等のプログラムを実施した(表1)。学術・国際活動委員会では、派遣元の大学担当者と、準備から評価までの全期間にわたり、メールや国際電話にて密に連絡を取ることで、教育・指導を協働で行った。韓国のソウル国立大学の4名の留学生には、事前(2か月前)にソウル国立大学において、本学と先方大学の国際委員長がそろって面談する機会があり、十分な準備ができるように、心配事や疑問点に直接答えて支援した。

(3) 生活面の支援

千葉大学国際教育センターの支援のもと、千葉大学国際交流会館の宿泊の手配を行い、宗教等の文化的配慮に留意して各国の留学生の生活面での支援を行った。特に食事については、留学生個別に基本情報を確認した。

(4) 安全管理面の支援

安全面については、SS用の全学的な危機管理マニュアルが無く、受入れ留学生に対しては大学が契約している海外旅行保険制度もないため、事前に派遣大学の担当教員に旅行保険への加入について依頼した。渡日前に、メールにて全員分を確認した。滞在中の緊急連絡先については、英語の対応および夜間帯の体制が必要なため、学術・国際活動委員が分担して電話受けの責任者リストを作成し、オリエンテーション時に注意事項とともに説明した。緊急時の情報は、研究科長および事務部担当者への連絡を含むものとした。また、留学生の滞在中の緊急受診に備えて、大学病院看護部の協力を得て受け入れの申し合わせが行われた。

Ⅲ. 実施概要と評価

1. ショートステイ(SS)による異文化看護(Transcultural Nursing:TCN)プログラムの展開

表2に示すように、アジア3か国3大学から8名の留学生を受け入れた。8月1日の夕刻に、国際交流会館の会議室にて、各国担当教員3名、本研究科留学生担当事務1名で、全体オリエンテーションを実施した。ラマダンに重なっていたため、夕食時間に配慮を要した。また、宿泊室は、男女の人数の関係で、国別ではなく国の混合となったこと、インターネットの接続支援および宗教的な配慮を行った。

2. ボランティア学生との相互交流

本プログラムの特徴の一つは、本学の在校生がボランティアとして留学生と交流し、留学に準じた体験を積むことにある。今回、2～4年の学部生16名、および13名の大学院生、合計29名がボランティアとして参加した(表3)。掲示板での募集後、希望者には、事前オリエンテーションを実施し、各日のリーダーおよび連絡先の確認を行った。保護者らから構成される後援会からも、国際交流活動費として資金援助を得て、ボランティア学生の交通費等に充当した。本学学生の活発な参加により、学生同士の各国の看護の紹介など、アジア4か国の交流が実施できた。

3. 学生のレポートからのプログラム評価

8名の留学生から提出された英文レポートから、各国各校別にプログラム評価についてあげる。レポートは、留学前後の変化に焦点をあてて書かれた。

(1) インドネシア、ガジャマダ大学

- ① 留学生支援制度の情報について：日本への留学支援の本制度の内容がわかりにくく、自分が申請してよいかわかりにくかった。
- ② 事前学習：選考されてから、日本について集中的に事前学習を行い理解を深めた。
- ③ 留学前の心配事：経費、言語、文化(特に食事)について心配であったが、経費については、今回の奨学金によって支援されるので心配は軽減されると思った。
- ④ 言語について：日本では英語がわかる人が少ないので困ったが、本プログラムでは、初日にサバイバル日本語講座があり、滞在中に活用できた。
- ⑤ 文化について：アジア人として多くの共通点もあるが、違いもあり、日本人は丁寧で英語には訳せないが人とのつながりを大切

表1 ショートステイ (SS) による異文化看護プログラム日程表

8月1日(水)	千葉大学国際交流会館にてオリエンテーション
8月2日(木)	「サバイバル日本語」講座, 文化交流セミナー, 学内ツアー, 歓迎会
8月3日(金)	(病態学分野) 柏の葉キャンパス見学
8月4日(土)	歓迎プログラム(千葉幕張海岸)
8月5日(日)	地域踏査ツアー
8月6日(月)	(地域看護学分野) 市健康福祉センター訪問 (老人看護学分野) セミナー
8月7日(火)	(成人看護学分野) 千葉大学医学部附属病院訪問 (精神看護学分野) 病院訪問
8月8日(水)	(小児看護学分野) 保育園訪問 (機能・代謝学分野) 看護研究セミナー (学術・国際活動委員会) 送別会
8月9日(木)	留学生帰国

表2 ショートステイ (SS) による異文化看護プログラムによる受け入れ留学生の属性

国名	大学名	人数(性別)	学年
韓国	ソウル国立大学	4名(女性)	3学年
中国	北京大学	2名(男性)	3学年
インドネシア	ガジャマダ大学	2名(女性1名・男性1名)	5学年
合計 3か国	3大学	8名(女性5名, 男性3名)	

表3 ショートステイ (SS) による異文化看護プログラム参加のボランティア学生の属性

	学年	人数(性別)
学部生	2学年	5名(女性)
	3学年	9名(女性)
	4学年	2名(女性)
大学院生	博士前期課程1学年	13名(女性8名, 男性5名)
合計		29名(女性24名, 男性5名)

にする大事な言葉がある。

- ⑥ 食べ物や宗教について：イスラム教の律法にのっとった食事をする必要があり，日本では魚類がありコストも安価で助けとなった。驚いたことは，日本の教員や学生がイスラム教に対する配慮があり，1日5回の祈りができるように支援してくれた。
- ⑦ 日本での学び：日本での学びは，創造的で革新的であった。インドネシアでは，看護師の勉強は，4年間の座学後，1年半の臨床実習が必要だが，日本，中国，韓国では4年間で卒業できる。また，学習方法も，日本では本プログラムでゲームなども取り入れて，興味深く勉強できた。
- ⑧ 看護学生の国際レベルの交流：本プログラムで4か国の看護学生と交流し助け合った経験から，国際レベルでの協力を今後継続していけると思った。困ったことがあっても一人ではないと思えた。
- ⑨ 将来の展望：本研究科の大学院への進学を希望する。

(2) 中国，北京大学

- ① 海外で学ぶことの意義：初めての留学で，その意義について知った。それは幅広い情報や知識をえて視野を広げ，将来の自身の研究分野につながることであった。
- ② 日本の理解：日本については歴史書からのみの知識であったが，実際に教員や学生と交流して心配が払拭された。日本では，古いものを大切に伝統を引き継いでいる点は学びたい。親切な人々，便利な交通などの経験は，自分の人生の大事な1コマになった。
- ③ 本プログラムの多様性：短期間に，多くの看護分野について学び見学ができた。
- ④ 4か国の学生交流：再会することは難しいと思うが，友情は一生続くと思う。
- ⑤ 国際理解：多様な国での制度，文化やその中で働くことは異なるが，ケアリングと責任は共通である。
- ⑥ 将来の展望：海外留学して，新しい技術やアイデアなどを自国のために活用したい。

短期留学ではなく、海外で在籍して学びたい。

(3) 韓国, ソウル国立大学

- ① 渡航前の不安：見知らぬ土地で見知らぬ人々に囲まれることへの不安があった。
- ② プログラムの内容と方法：プログラムの内容と講義だけでなくアクティブな教育方法に満足した。病院や施設だけでなく、社会の中で役割をはたす看護について学びとなった。日本だけでなく、インドネシアおよび中国の文化の理解も深まった。たとえば、日本人の親切さについて、3か国の留学生で討議した。また、学年も多様であったので、国は異なっても看護学生の先輩からの話は視野が広がった。
- ③ 韓日比較：近隣国として多くの類似点があり、看護教育についても比較できた。特に施設見学で垣間見た、日本人の高齢者への丁寧な対応の仕方が印象的であった。
- ④ 日本理解：日本人の省エネ、親切さ、自国の文化を大事にする（浴衣を着る）点が日本の強みと発見した。
- ⑤ 英語での意見交換：英語の大切さを身をもって感じた。多国の留学生と英語での意見交換に問題は感じられず、自分の意見を英語で述べ討議することに自信がついた。
- ⑥ 韓国からの外国人留学生との交流：学生生活について具体的な話を聞いて、不安が解消された。
- ⑦ 将来の展望：千葉大で出会った海外からの大学院生のように、海外の大学院に進学したい。海外で学ぶことへの恐怖心が無くなり、英語をもっと勉強したくなった。日本か米国に留学して将来は韓国で研究者になりたい。

IV. 成果と今後の課題

今回参加を得た、3か国3大学は交流協定校であり、短期間に本制度を理解し留学生の派遣に協力を得た。準備、実施、終了後のフォローアップの全期間にわたり情報交換を行った。

参加した留学生8名からの評価と満足度は高く、どの大学からも本学からの留学生派遣の受入れを歓迎する申出を得た。韓国・ソウル国立大学へは、本研究科から学部生と引率として教員を送り出している。インドネシア・ガジャマダ大学へは、今後の留学生交流の準備として、本委員会の若手教員を派遣した。中国・北京大学とは日程があわな

かったため、台湾・成功大学へ若手教員を派遣した。このように、学生の交流だけでなく、教員の交流も図り、大学間ネットワークの構築に継続して取り組んでいる。教員の渡航費や、留学生の体験レポートの英語によるHPへの掲載については、本研究科の重点整備費で助成された。

本プログラムは、海外からの留学生だけでなく、本学のボランティア学生、教職員にとっても異文化交流の機会となった。学業関連、語学関連、異文化理解関連、将来の展望、その他国際人としての力量などで成果がみられた。看護学発展のキーワードの一つである「ダイバーシティ」が有機的に機能したと考える。今後の課題は、留学生の受入れ体制と予算といった、管理面の充実整備にあるといえる。

謝辞

本プログラムの趣旨に賛同し留学生の派遣および大学間ネットワークの構築に尽力くださった、ソウル国立大学前看護学部長 Insook Lee, RN, PhD, 国際委員会前委員長 Kyung-Sook Bang, RN PhD, SV 担当教員 Sun-Mi Chae, RN, PhD, 北京大学看護学部耿笑微 Kelly, RN, PhD, ガジャマダ大学 Elsi Dwi Hapsari, BN, MS, DS, Sinta Kristanti, S.Kep, Ns, MN 教授陣、および本研究科の正木治恵前研究科長に感謝いたします。

参考文献

- 1) 鳥飼玖美子, 野田研一, 平賀正子, 小山亘編：異文化コミュニケーション学への招待。みすず書房, 2011
- 2) Joyce N. Giger, Ruth E. Davidheizer: Transcultural Nursing: Mosby, 1995.
- 3) Margaret M. Andrews Joyceen S. Boyle: Transcultural Concepts in Nursing Care, Journal of Transcultural Nursing, 13,178-180, 2002